



つらいこともあったけれど、 多くの出会いが状況を変えてくれた。

障害福祉サービス事業所 くじらのしっぽ②

- ◎利用者：小川絢子さん(女性／当時29歳・知的障害)
- ◎管理者：阿部かよ子さん ◎職員：多田剛優さん
- ◎グループホーム くじらのしっぽ ひまわり 生活支援員：阿部安子さん



— 仮設のグループホーム —



— 製造している製品 —

グループ ホーム

支援の手が入らず、あきらめ
ムードの中でも必死に声を上
げた。

「くじらのしっぽ」のもう一つの事業に、グループホーム「ひまわり」があります。海に近かった「ひまわり」は津波で浸水し、入居者さんは避難所生活の後、グループホーム型仮設住宅に引っ越すことになりました。しかし法整備が整わず、引っ越しは被災者の中で最後になりました。

また、被災後間もない頃、物資が来ても、入居者さんには「何か必要なものはないですか」という声かけはありませんでした。仮設住宅に入居後も、仮設住宅の名簿に入居者さんが掲載されていなかったため、支援物資や配布物をもらうことができなかったのです。

障害者が端に寄せられるという感覚、誰も見にきてくれないという疎外感。職員の中にあきらめムードが漂ったこともありましたが、声を上げることは忘れませんでした。職員の頑張りが奏功し、少しずつ物資や情報が届くようになり、状況が変わり始めていきました。

出会い

たくさんの人とつながって支援
が入り、新しい作業を始めるこ
とができた。

「くじらのしっぽ」では、震災前に行っていた作業がすべてできなくなってしまいました。何とか別の作業を始めたいと、地元の産業であるわかめの芯抜き作業を委託してもらおうと考えました。地域の広報誌にそのことを

載せると、人手不足に悩んでいたわかめ業者から声がかかったのです。うまい具合にマッチングが進み、わかめの芯抜き作業が始まりました。さらに販売も行いたいと声を上げると、さまざまな団体から支援が入り、冷凍庫をはじめさまざまな備品や設備を調達することができました。

こうした状況の変化には、震災後、被災した事業所が手を取り合って課題や思いを共有する、被災障害者就労支援事業所連絡会議への参加が大きな役割を果たしました。さまざまな人と会って話すことで、作業復活に必要な情報を得たり、同じ境遇にある事業所の事例を参考にしたりすることができ、広い視野で次の一手を考えられるようになったのです。

今後は

町の産業の担い手や情報の
発信者として、新たな事業所の
姿を描く。

わかめの芯抜き作業をきっかけに、「くじらのしっぽ」ではさまざまな商品を作り、販売するようになりました。商品の噂を聞きつけたイベント主催者や企業から、「一緒にやりませんか？」と声をかけてもらうことも多くなりました。こうした状況の中で、利用者さんも職員も、作る物に対して厳しい目を持ち、責任を感じるようになっていきます。特にわかめの加工は町の大切な産業でありながら、従事者の高齢化が進み担い手が少なくなっています。そんな状況を受けて「我々が担い手っていうか、やんなきゃいけない、みなさんと一緒にね」と話す阿部かよ子さん。障害福祉の事業所でありながら商品や情報の発信者になる、そんな希望のある展開を実現していきたいと考えています。